

米国に10年、欧州にも数年住んでいたが、どこも食料自給率が高く、農業国として国力の強さを感じた。

「一次産業である農業を大切にしない国は滅びる」というのが持論。極端な話だが、たとえ石油の輸入が止まっても何とか生きていけるが、食べ物が入らなければ、即、国家の危機になる。日本ほど食料を、中国や米国をはじめ世界に依存している国はない。国全体の農業をマネジメント（経営）できるように、もっと食料政策に力を入れるべきだ。

これまで、いろいろな会社の再生を手伝ってきた。経営状況を判断する時、財務諸表の一つとなる損益計算書が基本になる。最近、全国の農家を訪問する機会があって、収支を見せてもらった。

にっぽん 未来図

農へのまなざし 第8部 ⑤

技術力に敬意

農の伝道者増やそう



小僧com社長 平松 庚三さん

ひらまつ・こうぞう 1946年北海道生まれ。早稲田大学を中退、ソニーや米国のIT企業などに勤めた後、2003年に会計ソフト販売の「弥生」社長、06年にライブドア社長になった。08年に「小僧com」を立ち上げ、50、60代を中心とする世代の交流の場をネット上につくっている。

人件費が計上されていらないなど驚かされることが多い。設備投資もそうだ。例えば、関西の農家で田植え機も17台あるが、田植え機も17台あるという。年間数日しか使わない機械に何百万円も投資

工場や会社は設備投資をする際、毎年の減価償却を計算し、それに見合うリターンがあるかを吟味する。経営とは、コストの無駄を省きながら、知恵を出し合って市場を開拓すること。そうした経営のノウハウを農家もJ Aも、もっと生かすべきではないだろうか。

「小僧com」を一年に立ち上げ、人生の後半戦を楽しむシニア世代の交流の場をネット上に作った。団塊の世代で、農業や地方に目を向ける人はとても多い。若者もそうだ。多彩な人が地域の農家とも交流しながら、農業の伝道者になってほしいと思う。

するというのは、一般のはもったいない。経営では考えにくい。別の所では、果物の選果機に掛かる多大なコストが悩みと聞いた。

輸出もそう。安全でおいしい日本の農産物、特に果実は、世界中に市場が無限にある。本来、こうした農業のありようは、日本全体で考えるべきことと思う。

「農業は何とクリエイティブ（創造的）だ」と言うのと、周りの農家は驚くが、化学、物理学、生物学、気象学と、すべてに関連しており、奥が深い。技術面、経営面も含めていろいろ研究していきたい。

（聞き手・堀越智子）